



再掲



戦後ののフランクル

夜と霧の明け渡る日に

6月24日発売

未発表書簡、草稿、講演

◆四六判・312頁・本体2400円

ヴィクトール・フランクル／アレクサンダー・バティアーニ編／赤坂桃子訳

戦後の新たな人生を歩みだそうとするとき、フランクルは何を感じ、
考えていたのか。いま明かされる名著誕生の背景。

強制収容所からの解放と帰郷という、フランクルの人生において最も重要な時期の伝記的な事
実と、当時の中心思想の一端を、未公開書簡と文書を用いて再構成する。

名著『夜と霧』誕生の背後にあった個人史と時代史の二つの文脈が、初めて明確に交差する。
編者は、膨大なフランクル文献に最も詳しい、ウィーンのヴィクトール・フランクル研究所所
長アレクサンダー・バティアーニ博士。

ヴィクトール・フランクル（1905—97）ウィーン大学の神経学

および精神医学の教授で、ウィーン総合病院神経科科長も25年間に
わたって務めた。フランクルが創始した「ロゴセラピー」および実存
分析」は、「心理療法の第三ウィーン学派」とも称される。ハーバ
ード大学ならびにスタンフォード、ダラス、ピッツバーグの各大学で
教鞭をとり、カリフォルニア州サンディエゴにあるアメリカ合衆国
国際大学のロゴセラピー講座の教授も務めた。フランクルの39冊の
著作は、これまでに43か国語で出版されている。“trotzdem ja zum
Leben sagen.”（邦訳名『夜と霧』の英語版は「ミリオンセラーとなり、
アメリカでもっとも人々に影響を与えた10冊の本」に選ばれた。

〈グローバル・ヒストリー〉 の中のキリスト教

近代アジアの出版メディアとネットワーク形成

◆ A5判・296頁・本体5200円

ミラ・ゾンターク編

6月24日発売

キリスト教史への新たな視角

= 〈グローバル・ヒストリー〉！

この概念を手がかりに、大陸をまたぐネットワークと多極構造を反映する新たなキリスト教史の構築を目指す「ミュンヘン学派」。

主導するコショルケ氏ら7名の論者が、近代東アジアにおける活字メディアに着目した、意欲的共同研究。ゾンターク氏は立教大学文学部キリスト教学科教授。



【目次より】

第1部 「グローバル・クリスチャニティのミュンヘン学派」とは何か

第1章 キリスト教のグローバル・ヒストリー
クラウス・コショルケ

第2章 宗教と人口移動 クラウス・コショルケ

第3章 東シリアのネストリウス派「東方教会」
クラウス・コショルケ

第2部 近代アジアとアフリカのキリスト教系新聞・雑誌の比較研究

第4章 新聞・雑誌に映し出される1900年頃のアジア・アフリカ現地人キリスト教徒エリート
クラウス・コショルケ

第5章 近代アジアにおける現地人キリスト教徒エリートのネットワーク
クラウス・コショルケ

第6章 フィリピン教養人イサベロ・デ・ロス・

レイエスと「フィリピン独立教会」
アドリアン・ヘルマン

第3部 近代東アジアにおけるキリスト教系新聞・雑誌の比較研究

第7章 キリスト教愛国主義と大日本帝国の膨張主義
ミラ・ゾンターク

第8章 『新人』の誕生 マイケル・I・シャピロ

第9章 『万国公報』における中国人知識人のキリスト教観
倉田明子

第10章 *The Chinese Recorder* 考 渡辺祐子

第11章 近代台湾における非エリートの文字文化の成立
高井ヘラー由紀

第12章 大日本帝国と福音派プロテスタント教における「公共」と朝鮮キリスト教(1910-1919)
マイケル・I・シャピロ

山下壮起著

ヒップホップ・レザレクション

ラップ・ミュージックとキリスト教 今や世界的大衆文化となつたヒップホップ。その最初の担い手であったアフリカ系アメリカ人における宗教的機能を探り、ヒップホップと既存教会との関係や聖俗観・救済観を検討する。気鋭の神学者による注目作。

◆A5変型判・本体3200円

カルヴァン著／堀江知己訳

アモス書講義

1559年に創設されたジュネーヴ大学で、カルヴァンが週3日、隔週で行つた講義の記録。ヘブライ語原典を自らラテン語に訳し、逐条的に入念なパラフレーズを行うスタイル。注解書とは趣を異にするライブ感溢れたカルヴァンの講義の様子を生き活きと伝える。

◆A5判・予価5000円

石原知弘著

バルト神学とオランダ改革派教会

大森講座ⅩⅩ オランダほどバルト神学を積極的に受容した国はなく、オランダほどバルト神学を厳しく批判した国もないと言われる。バルト神学が20世紀の教会にもたらした影響の象徴的な事例として、その歴史的背景と神学的・教会的意味を考察する。

◆四六判・予価1200円

●4月に出た本と雑誌

協力と抵抗の内面史

戦時下を生き延びたキリスト者たちの研究

富坂キリスト教センター編



「戦争協力者」か「抵抗者」かといつた一面的断裁を排し、キリスト者個々人の内面の歩みに注目、追隨・加担・協力、そして沈黙・拒否・抵抗の諸相を重層的に跡づけようとする。植民地下の現地のキリスト者にも着目する。

◆四六判・本体2000円

■重版 ことばのともしび

末盛千枝子



人生の様々な試練と出会いと恵みを、美しい言葉で綴つた待望のエッセイ集。自らの人生を引き受け、前向きに生きていくことへの、励ましに満ちたメッセージ。

◆四六判・本体1000円

福音と世界

◆税込635円

6月号 「差別」再考

寄稿者：好井裕明、風間孝、三部倫子、矢吹康夫、李恩子、堀江有里、堀あきこ／マニユエル・ヤン、石井光太、窪美澄、内田樹、辻学、長谷川修一、山口政隆、佐藤優

●五月一七日、一八日(金、土)の二日間、わたって、東京・水道橋の在日韓国YMCAで第一回オリブ平和映画祭が開かれました。この映画祭は同YMCAとパレスチナ・東エルサレムYMCAとの提携関係を念頭に、イスラエル・パレスチナ問題への理解と共感の輪を広げることを目指すものです。今年は、日本での上映回数が少ない『ラヤルの三夜』(メイ・マスリ監督)と『乳牛たちのインティファード』(アメル・シヨマリ、ポール・コーワン監督)の二本が上映されました。わたしはスタッフ兼物販に

『福音と世界』を出展という立場で参加したのですが、全体に熱を帯びたい会だったように思います。とくに個人的に感慨深かったのは、映画の解説トークをしてくださった早尾貴紀さん(東京経済大学)との再会です。わたしが大学院生だった二〇一四年、イスラエル軍による大規模なガザ攻撃がおこなわれ、いてもたってもいられず緊急学術講演会「いまここからガザ攻撃を考える」を主催したのですが、そのときに講師として力を貸してくださったのが早尾さんです。いちどは『福音と世界』にもご寄稿いただき(二〇一七年一月号)、いつも協力を願っています。恐縮ながら、五年前と変わらざくりティカルかつりリカル

な語りを展開される早尾さんの姿にはたいへん勇気づけられました。そしてわたしもいま、あらためておもいます。パレスチナのために、あらゆる手段をつかって何だっでしょう、と。(堀)

●文化庁が、日本人の姓名をローマ字で表記する場合「姓名」の順にしようと呼びかけて話題になっています。二〇〇〇年に同じ通知をしていたのですが、二〇年近くたっても浸透しないため再度の通知となったのだそうです。姓名表記を現地方式でという考え方自体は納得できません。小社では、装丁家が著者名をデザイン的にローマ字であしらう際、姓名の順にして両者をコンマで区切るというやり方が多くありました。ただし著者が欧米方式を希望する場合はご本人の希望を優先しています。最近編集部で議論になったのは、韓国人の姓名表記でした。姓と名を一字アキにすると頭と胴体が切り離された感覚がするのでベタか均等割にしてほしいという希望が、著者ご本人から寄せられたのです。今まで考えたこともなかった指摘なので驚きましたが、確かに韓国では一字姓が圧倒的ですのでわざわざ姓名を離す表記は不自然だったのでしよう。議論の結果、今後は日本人も含めて原則的にベタか均等割でやってみようということになりました。(小林)

福音と世界

2019年
7

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8460円

特集「聖書 聖書協会共同訳」を読む

聖書は読者の価値観を映し出す

—— 新共同訳から共同訳へ —— 月本昭男

新しくなれなかつた新翻訳 —— 辻 学

「聖書翻訳検討委員会」の員になって —— 山口里子

礼拝と聖書翻訳を考える —— 越川弘英

ひとりの説教者の雑感 —— 金迅野

言葉に向かう構えをめぐる —— 白井一美

生かす言葉・殺す言葉 —— 古賀博

八割の壁は越えられるか!? —— 望月麻生

本当はあまり買いたくなかつた —— 沢知恵

変わらない世界に、変わりゆくことばで —— 富田正樹

もう少し様子を見よう —— 富田正樹

スリランカで起こされたテロリズムについて……志村真

【好評連載より】

◆バビロンの路上で 4 …………… マニエル・ヤン

◆神の酒 4 …………… 石井光太

◆新約釈義 テトス書 4 …………… 辻 学

◆遺跡が語る聖書の世界 8 …………… 長谷川修一

◆聖書とわたし 40 (最終回) …………… 安田菜津紀

◆レヴィナスの時間論 51 …………… 内田樹